

新しい共同体（家族）の形成を目指して：キリスト教の立場から

著者	菊地 順
雑誌名	キリスト教と諸学：論集
巻	Volume30
ページ	(61)-(70)
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002361/

新しい共同体（家族）の形成を目指して

—キリスト教の立場から—

菊 地 順

1. 子どもの問題・家庭（家族）の問題—孤立と孤独

シンポジウムの発表者の原稿を予め読んで、改めて気づかされたことは、子どもたちの問題の背後には家庭（家族）の問題があるということである。その中でも、家庭（家族）がさまざまな問題に遭遇する中で、社会的、精神的に〈孤独〉と〈孤立〉の中に置かれているということである。現実のさまざまな問題に対し、それに即した対応が行政を中心とする関係機関に求められており、実際さまざまな取り組みがなされてきている。そのことは、今回の発表にも具体的に示されるであろう。しかし、そうした取り組みだけではなかなか手が届かないところに、家庭の抱える〈孤独〉と〈孤立〉の問題があるのではなかろうか。もちろん、そうした点でも、行政を初め学校や地域は連帯の絆を深める努力を積み重ねてきており、その点は評価されなければならない。しかし、それでもなおなかなか克服し難い〈孤独〉と〈孤立〉があり、それが問題の根を深くしているように思われる。

おそらく、〈孤独〉と〈孤立〉という問題は、子どもたちの問題を抱える家庭だけの問題ではなく、現代社会全体の問題でもあろう。人間は、〈私〉という中心を持つ一個の存在として、きちんと自己が確立されることが大切である。それは、〈個別化〉と呼ぶことができるであろう。そのため、その限りでは、人間は本質的に〈孤独〉であると言える。それは人間が置かれている厳しい現実であるが、しかしまた大切な一面でもある。しかし、同時に、人間は他者との〈交わり〉の中で育まれ、社会の一員として成長していくものでもある。それは他者や社会への〈参与〉と呼べるであろう。

新しい共同体（家族）の形成を目指して

そのため、〈孤独〉と〈交わり〉、〈個別化〉と〈参与〉がきちんと確立されていくことが大切なのである。しかし、それがうまく確立されないとき、特に他者や社会との交わりや参与に困難が生じるとき、そのバランスが崩れ、その結果、時には深刻な〈孤立〉に陥り、また不健全な〈孤独〉に苛まれることになる。そして、現代社会には、そうした〈孤立〉や〈孤独〉が深くはびこっていると言えるのではなかろうか。

インドで貧しい人たちの救済に取り組んだマザー・テレサは、その後その活動を全世界へと広めて行ったが、現代社会に存在する最も深刻な病は〈孤独〉であると語っている。しかも、先進国と呼ばれる国々で、それが顕著に見られると言う。その点では、日本も例外ではないのではなかろうか。しかも、そこには、さまざまな歴史的・外的要因があるのである。

2. 故郷喪失の時代—アイデンティティの危機

2011年3月の死者・行方不明者18,000人以上という大災害をもたらした東日本大震災から、すでに5年半が経過した。しかし、今でも14万人以上（2016年4月現在）の人たちが避難生活を余儀なくされている。おそらく、その中には、故郷に帰るのを諦めた人たちも多いと思われる。その後も、こうした災害が毎年のように起こり、甚大な被害が出ているが、そこにある最も深刻な問題は、故郷喪失ということではなかろうか。避難を余儀なくされ、人々が散り散りになったあと、町の再建が進まず、人々が帰りたくても帰れない状況が生じているところが少なくない。それは、長年住み慣れた町や村を離れ、異郷の地での生活を強いられることで、それは正に故郷を失うことである。

しかし、それは、理由は異なるとしても、日本だけではなく、世界各地でも起こっている。中東では、戦火に追われ、多くの難民が発生し、多くの人たちがヨーロッパを目指している。アフリカからは、政治的、経済的苦境から抜け出すために、これまたヨーロッパを目指す人たちであふれている。しかも、この故郷喪失は、ここ10年、20年の間に生じた問題で

はない。それは、20 世紀の 2 つの世界大戦の結果生み出された世界的問題でもある。2 つの世界大戦によって多くの難民が生まれ、それが世界問題となった。そのため、1950 年には、その問題を解決するために、国連に国連難民高等弁務官事務所が開設されたほどである。しかし、「戦争の世紀」と呼ばれた 20 世紀には、2 つの世界大戦後にも、民族の独立を求める多くの戦争が起こり、その度ごとに多くの人たちが難民となり、故郷を追われた。そしてまた、この問題は、さらに遡れば、18 世紀後半のイギリス産業革命の時代に、多くの人たちが労働力として田舎から都会に移り住む中で生じた問題でもあった。多くの人たちが、都会での生活の中で、〈故郷〉という背景（アイデンティティ）を失い、根無し草の〈大衆〉となって行ったのである。

しかし今、故郷喪失の問題は、日本でもますます深刻な、そして身近な問題となっているのではなかろうか。そして、そこに、現代社会が抱える深い問題があると言える。というのも、故郷を喪失するということは、自己のアイデンティティを失うということでもあるからである。東日本大震災後、多くの人たちが自然と口にするようになった歌がある。それは、あの「ふるさと」という歌である。「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」と歌い出す歌である。人々は、あの「ふるさと」という歌に、自分たちの深いアイデンティティを感じたのではないだろうか。そして、改めて故郷の重要さとその貴さを再認識したのではないだろうか。そして、自分たちの人生がいかに深く故郷に負っているかを感じ取ったのである。しかし今、その故郷が、さまざまな原因で失われつつある。また失われてはいないとしても、失われる不安と危機感を抱く人たちは少なくない。そういう深刻な精神的問題に、われわれは今直面している。そして、家庭（家族）が抱える〈孤独〉や〈孤立〉の問題も、そうした歴史的・外的要因と無関係ではないのである。

3. 新しい共同体（家族）の形成—モデルとしての教会

それでは、そうした〈孤立〉や〈孤独〉を克服し、共同体を回復するには、どうしたらよいのであろうか。特にバブルが弾けてからは、多くの行政や自治体がこの問題に取り組んできたように思う。町興しや町の再生化を目指した取り組みには、政治的、経済的な取り組みから郷土愛の復活などを目指す取り組みまで、幅広い取り組みが見られる。そうした努力は、今後とも不可欠であろう。しかし、そのことを踏まえた上で、ここでは敢えてキリスト教の立場から、この問題を考えて見たいと思う。というのも、キリスト教は、その成立以来、共同体の形成という課題に絶えず取り組んできた団体でもあるからである。それは、何よりも、教会という存在に現われている。

教会は、イエスをキリスト（「救い主」）と信じる人たちの集団である。それは、長い間、国家と深く結びついていたが、今から 500 年前の 1517 年に宗教改革が起こり、そうした新しい動きの中で、国家とは結びつかない教会が誕生した。それは、一般に「自由教会」と呼ばれているが、それは国家と結びついた国教会が国家の財力で維持されたのに対し、自由教会は自分たちの自主的な献金でもって教会を支えた。それは、自分たちの信仰の自由を守るためであった。そして、その大半は、いわゆる地縁・血縁関係を超えて形成されていったが、そこに、それまでにはなかった信仰に基づく新しい共同体（家族）の特質がある。そして、こうした特質を持つ共同体（家族）は、今さまざまな家庭の問題が論じられ、家庭崩壊の現実や危機が少なからず表面化しているとき、新しい共同体（家族）を形成する上で、一つのモデルとなるのではなかろうか（ただし、誤解を招かないように付言すれば、地縁関係を超えているということは、地域を無視しているということではない。それどころか、教会も地域に深く根ざすことを目指している。ただ初めから生まれ育った町にある教会にしか行けないというのではなく、それを自由に選べるということである。また、一生一つ

の教会に属するというのではなく、たとえば転勤などで引っ越した場合、引っ越した新しい町の教会に、以前属した教会と同じように属することができるという自由を語るものである)。

それでは、教会とは、こういった共同体なのか。聖書は、教会について、次のように語っている。「体 [=教会] は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、『わたしは手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、『わたしは目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部ではなくなるでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体の一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって、『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前は要らない』とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分は共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」(聖書、コリントの信徒への手紙一、12:14-26)

ここで聖書は、教会を一つの体にたとえて語っている。すなわち、体はいろいろな部分や器官からできている。そして、それぞれが体を形成する上で重要な役割を担っている。確かに、中には他の部分から見れば見劣りのするところもあるかもしれない。しかし、それも体の一部であり、全体を構成している一部であるため、体が一つの全体として機能するために

新しい共同体（家族）の形成を目指して

は、劣って見えるところにもバランスが取られ、見栄え良くされている。そして、何よりも、「一つの部分が苦しめば、すべての部分は共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶ」連帯の中に置かれている。聖書は、それが教会であると語る。そして、教会は、2000年に渡ってその理想を追求してきたのである。

ところで、この教会を形成し、養う上で重要なのは、同じ価値観、同じ方向性を持つことである。それは、イエスをキリストとして受け容れ、キリストによってもたらされた救いを共通の財産として分かち合うことである。そのために、重要な役割を果たしてきた一つが、教会が2000年に渡って守ってきた「主^{しゅ}の祈り」である。しかも、その祈りは、世界中のすべての教会が共通して祈っている祈りである（キリスト教には、大きく分けて三つのグループがあり、それぞれ独自の歴史と伝統を培ってきた）。この「主の祈り」と呼ばれている祈り（ただし、ヨーロッパでは主に「我々の父」と呼ばれている）は、「主」（＝イエス・キリスト）が弟子たちに直接教えた祈りという意味で、以下のような祈りである（プロテスタント教会の「主の祈り」は文語体で少し分かりづらいため、口語訳のカトリック教会の「主の祈り」を紹介する）。それは、神への賛美と共に神の救いの計画が実現すること、また「日ごとの糧^{かて}」、相互の罪の赦し、悪からの救いを求める祈りで、共同体を形成する要となっている。

天におられるわたしたちの父よ、

み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの糧を今日も お与えください。

わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。

わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。

国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。

教会は、2000年に渡って、この「主の祈り」を祈る中で形成されてきたと言っても過言ではない。この祈りに祈られているように、神を中心に、相互の赦しに基づく交わりを絶えず祈り求めてきたのが教会である。

4. 新しい「ゆりかごから墓場まで」—生涯にわたる交わり（人間関係）

教会は、以上で触れた内容を中心としている。そのため、教会では、教会員同士を「兄弟姉妹」と呼ぶ。血の通った兄弟姉妹ではないが、互いをキリストを頭とする兄弟姉妹と理解し、そう呼び合う。イエスも、「私の天の父の御心を行う人が、私の兄弟、姉妹」であると語っている（マタイによる福音書12:50）。ここに、血縁を超えた新しい家族の姿がある。こうした血縁や地縁に捉われない人間関係は、また生涯にわたる関係でもある。教会の一つの特色は、教会には乳児から高齢者まで存在するということである。昔の日本の家庭のように、生まれたばかりの赤子から祖父や祖母といった高齢者までいる。その点、学校とか会社などとは大きく異なる。それは、生まれた時からこの世を去る時まで、教会生活を人生の基軸とするからである。以前、日本でも、「ゆりかごから墓場まで」(from the cradle to the grave)という言葉がよく聞かれた。それは、第二次世界大戦後のイギリスにおける社会福祉政策のスローガンであったものだが、教会の交わりは、正に「ゆりかごから墓場まで」連綿と続くのである。人間の交わりは、しばしば人生の節目節目において中断することがある。大学進学とか就職とか結婚とかで、住む場所も変わり、人間関係も変わる。そして、その度ごとに、新しい人間関係の構築が求められる。しかし、教会の交わりは、確かに教会が変わればその交わりも変わるが、キリストを頭とする兄弟姉妹の基本的な交わりは変わらない。それは、海外に行っても同じである。そのため、その交わりは、正にゆりかごから墓場まで続くのである。そこに、環境が変わっても変わらない人間関係があり、そこには生涯にわたって互いに支え合うシステムがある。

しかし、教会というのは、それが目指すものは普遍的価値があるとは言

新しい共同体（家族）の形成を目指して

え、だれでもが直ちに共有できるものではない。そこには、信仰の問題があり、大きなハードルがあると言える。しかし、その理念とするところを共有し、それを一つのモデルとして、将来の新しい共同体を考え、また現実の取り組みに反映させることはできるであろう。そして、そのために、いわば社会と教会との間に立つものとして、キリスト教学校（大学）があると言える。

5. 教会と大学と社会

キリスト教学校は、社会とキリスト教（教会）を結ぶものである。明治期以来、日本には多くのキリスト教の学校（幼稚園から大学まで）が設立されたが、学校法人聖学院もその一つである。特に聖学院大学は、1988年に明確な理念をもって建てられた。それは「聖学院大学の理念 10 カ条」にまとめられている。その中でも、社会との関連において重要なのは、第3条と第4条である。それは、以下のように謳っている。

第3条―「プロテスタント・キリスト教は、特に近代世界の成立と展開に独特な貢献を果たしてきたが、それゆえまた、現代社会において固有な責任を負っている。本大学は真剣な学術研究と生きた教育、霊的強化とを通して、このプロテスタント・キリスト教の現代文化に対する責任という世界史的課題を大学形成において遂行し、希望ある世界の形成に寄与せんとする。」

第4条―「本大学は、日本におけるプロテスタント・キリスト教の伝統及びその信仰的、文化的、教育的貢献に連なるとともに、その労苦と苦心の経験に虚心に学び、その信仰、文化、教育活動の新しい進展のために努力し、日本社会に対し新たな指標を打ち立てようとする。……」

聖学院大学は、プロテスタント・キリスト教に属する大学であるが、プロテスタント・キリスト教は、近代世界の形成において、特に自由の深化と拡大の点で大きな貢献をなしてきた。またそれゆえに、そのことに固有の責任を負うとの歴史的認識があり、聖学院大学は、特に信仰、文化、教育の分野において、積極的に社会に関わり、また貢献することを目指している。そして、その背後には、そうした活動を生み出す共同体（教会）がある。欧米のキリスト教大学（学校）の多くは、教会によって生み出されたものであり、そのため絶えず教会と社会との間にあってそれに橋渡しをする役割を果たしてきたが、聖学院大学も、そうした役割を果たすことを願い、また努力している。

6. 新しい共同体（家族）の形成に向けての試み

聖学院大学は、開学以来、社会とキリスト教（教会）を結ぶ働きを行ってきた。そこには、大きく分けて2つの取り組みがあると言える。一つは、社会と大学を結ぶ取り組みで、これは社会と教会を間接的に結び合わせる働きであると言える。そして、全体から見れば、この働き方が多い。それに対し、第二の取り組みは、大学を通して社会を教会へと結び合わせる取り組みで、それはより直接的な働きであると言える。聖学院大学は、この2つの取り組みを通して、社会を教会へと招き、また教会的価値を共有する機会を持ってきた。

以上の点を、もう少し具体的に触れると、前者で行ってきたことは、主に人的交流と文化的交流である。まず学生が入学し、そして卒業していくということは、学生が大学生活を通してキリスト教に触れ、その価値観を学び身につけることでもあり、それは学生を通して社会と大学が人的交流を持つことに他ならない。また大学から社会へと教職員の派遣があり、行政や文化活動を通してさまざまな人的交流が生じている。また文化的交流も多く、公開講座やリカレント教育、あるいは聴講制度などを通して、主に学習面での文化交流があるほか、地域に開かれた大学主催の音楽会や講

新しい共同体（家族）の形成を目指して

演会などを通しての交流もある。また学生の音楽団体やボランティア団体、あるいはゼミや有志による、さまざまな奉仕活動を通じた交流もある。また施設の面でも、大学図書館や1号館の「1カフェ」などを地域の人たちに開放し、学びや活動の場を提供している。そうした活動やサービスの多くは直接キリスト教に触れるものではないが、大学を通してその背景にあるキリスト教との間接的な接点となっている。

それに対し、後者は、社会がより直接的にキリスト教に触れる取り組みである。その中でも、最も直接的に教会に触れるのは、学生が授業を通して教会の礼拝に出席することであろう。というのも、学生は大学に属するが、また同時に社会から言わば送り出されてきた存在でもあるため、学生が教会の礼拝に出席することは、学生を通して社会が教会に接する一面も担うことになる（聖学院大学では、教会礼拝への出席を授業の一環として1学期に1度課している。また学生たちは、学内で行われる礼拝へも授業を通して出席している）。またそれ以外でも、学生たちは授業を通してキリスト教を学ぶと共に、音楽会・講演会・クリスマス行事等を通してキリスト教に親しんでいる。そして、その中には、音楽会やクリスマス諸行事のように地域に直接開かれたものもあり、それらは教会への直接的な招きともなっている。

以上のように、キリスト教学校（大学）は、教育機関であると同時に、その教育を培っている人間の交わりを重んじ、教会に具現化されているその普遍的価値を伝達・共有し、また教会そのものへの招きともなっている。そうした仕方でも、キリスト教学校（大学）は、社会と教会の架け橋となり、社会にモデルとしての教会を提示している。